多賀城市文化財調査報告書 第28集

年　報　5

平成２年度

平成４年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

当埋蔵文化財調査センターは、本年度で開館5周年をむかえることができました。当センターの主な活動である埋蔵文化財の発掘調査、資料の収集・保存、展示公開事業などの事業につきましては、多くの方々や関係機関のご指導・ご協力により所期の成果をあげることができました。改めて厚く感謝申し上げます。

さて、今回発刊することになりました年報5は、当センターが平成2年度に実施しました発掘調査及び展示公開事業の概要を掲載したものです。まず、遺跡の発掘調査においては、ここ数年増加傾向が続いている宅地造成や道路建設などの公共事業に伴って7件の調査を実施しましたが、限られた職員数で対応するために中には厳寒の真冬に調査を実施せざるをえない状況もありました。しかしながら、各調査においてはそれぞれみるべき成果をあげることができました。中でも山王遺跡第9次調査では、四面廂付建物跡を中心とした遺構群や「右大臣殿　餞馬収文」と墨書された木簡の発見から全国的にみても初めての「国守の館」跡を発見することができました。また、この「国守の館」跡を国指定史跡として保存しようと宮城県教育委員会とともに本市では国へ働きかけを行っているところです。

次に資料の展示公開では、第4回企画展「多賀城碑－今まさによみがえる」と速報展「発掘された遺跡展－平成元年度の成果報告－」を開催することができました。企画展は「多賀城碑」をテーマにこれまで偽物として忘れられた碑が、多賀城跡の発掘調査を契機に真物であると立証され、そのきっかけとなった考古学の成果を中心として展示してみました。また、速報展は、前年度に発掘調査を行った遺跡の紹介と出土遺物の展示を通して、埋蔵文化財に対する市民への理解を深めてもらう目的で毎年行っています。

最後になりましたが、職員一同今後とも事業内容の一層の充実に努めていく所存でありますので、皆様方の一層のご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成4年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎　藤　一　司

例　　言

1. 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが平成2年度に行った埋蔵文化財の調査報告と各種事業について、概略的にまとめたものである。

2. 各種事業報告は担当者が執筆し、また調査報告については下記の資料をもとに、各調査担当者の指導をうけて、年報担当者が加筆、編集した。

山王遺跡第9次調査 …… 平成2年度宮城県内発掘調査成果発表会資料

山王遺跡第10次調査 …… 〃

山王遺跡第11次調査 …… 平成2年度国庫補助事業実績報告書添付資料

西沢遺跡第1次調査 …… 〃

本　文　目　次

序　文

例　言

Ⅰ　調査報告 …… 1

1. 山王遺跡第9次調査 …… 2

2. 山王遺跡第10次調査 …… 4

3. 山王遺跡第11次調査 …… 6

4. 西沢遺跡第1次調査 …… 8

5. 西沢遺跡試掘調査 …… 10

6. 高崎遺跡試掘調査 …… 11

7. 山王遺跡試掘調査 …… 12

Ⅱ　事業報告 …… 13

1. 展　　示 …… 13

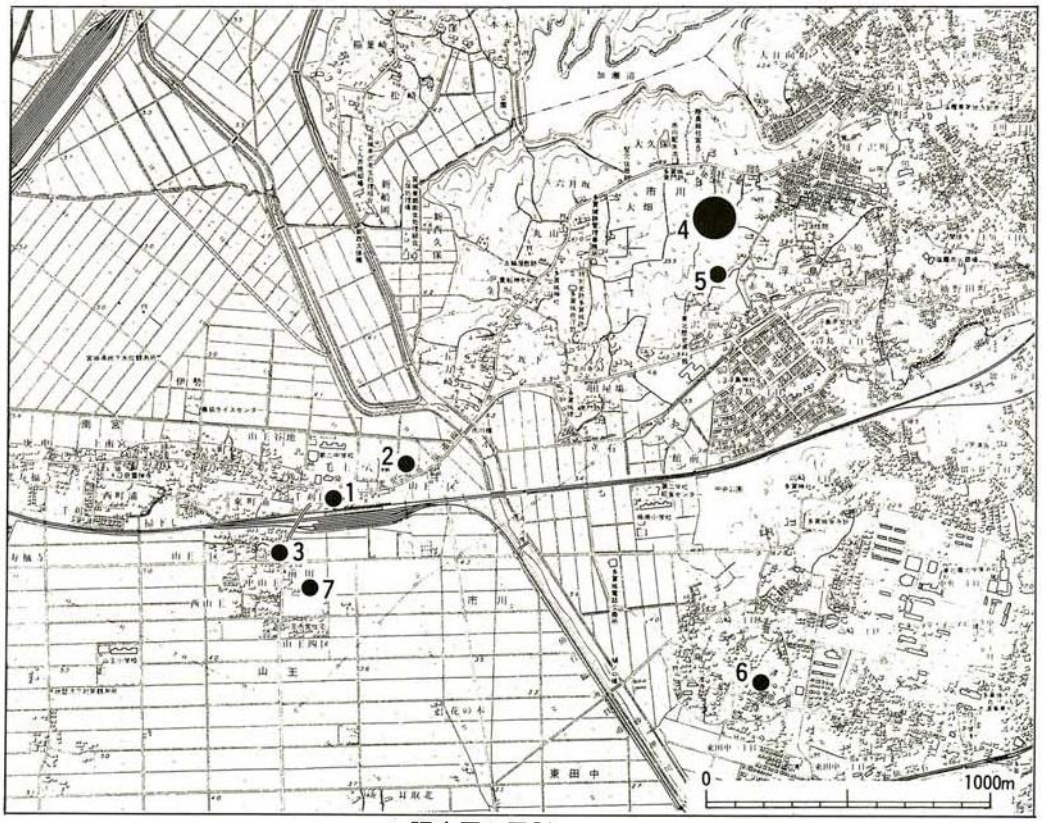
2. 普及活動 …… 19

Ⅲ　事務報告 …… 20

Ⅰ 調 査 報 告

平成２年度に実施した発掘調査の概略は、次のとおりである。

地図番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	原因	担当職員
①	山王遺跡(第９次)	多賀城市山王字千刈田５－７	平成２年４月16日～８月23日 10月29日～11月８日	740 ㎡	マンション建設	石川・相沢
②	山王遺跡(第10次)	〃 南宮字八幡地内	平成２年４月16日～12月19日	4,000 ㎡	仙塩道路建設	千葉・石本
③	山王遺跡(第11次)	〃 山王字中山王13－1他	平成３年１月28日～３月６日	240 ㎡	個人住宅建設	滝口・石川 相沢
④	西沢遺跡(第１次)	〃 市川字伊保石・浮島字西沢地内	平成２年10月22日～ 平成３年１月16日	1,278 ㎡	宅地造成	滝口・相沢
⑤	西沢遺跡(試　掘)	〃 浮島字西沢71他	平成２年６月11日～６月25日	258 ㎡	〃	滝口
⑥	高崎遺跡(　〃　)	〃 高崎二丁目144	平成２年９月10日～10月４日	65 ㎡	マンション建設	滝口
⑦	山王遺跡(　〃　)	〃 山王字山王四区７－５	平成２月10月15日～10月30日	210 ㎡	土地売買	滝口



調査区位置図

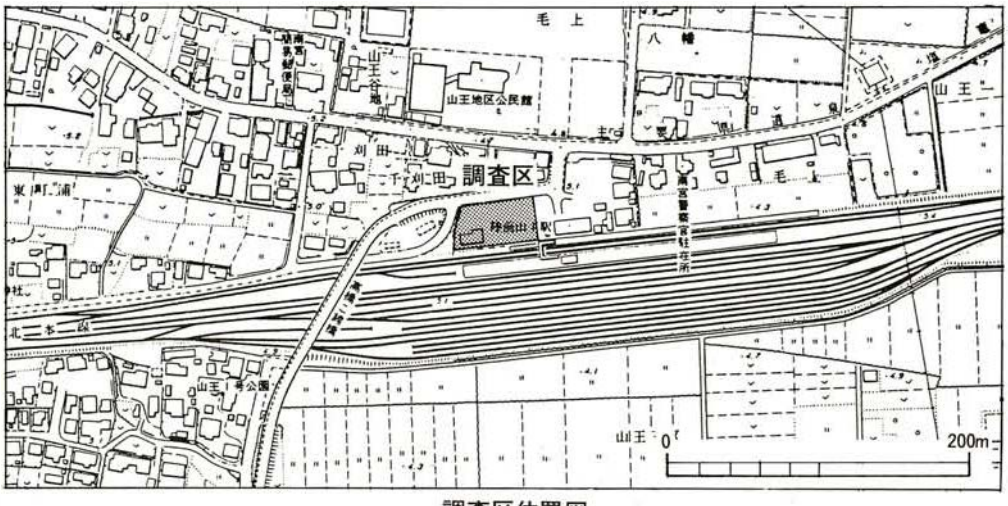
1．山王遺跡第９次調査

(1) 所 在 地　多賀城市山王字千刈田５番７

(2) 調査期間　平成２年４月16日～８月23日

平成２年10月29日～11月８日（補足調査）

(3) 調査面積　740㎡



調査区位置図

(4) 位置と環境

山王遺跡は、旧七北田川と砂押川によって形成された自然提防上に位置しており、古墳時代から近世にかけての大規模な集落跡である。本遺跡はこれまでの調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡・溝跡・土坑、古代の道路跡・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡等が発見されている。特に第４・８次調査において幅12mの東西方向に走る道路跡が発見され、この道路近くの土坑から、宗教行事に使われた多量の土器とともに、「観音寺」と墨書きされた土器が出土している。また、出土遺物には、灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁や硯・瓦・斎串等が出土しておりこれらのことからも本遺跡は古代多賀城と密接な関連があった地域であることが明らかになってきている。

(5) 発見された遺構と遺物

＜遺構＞

掘立柱建物跡19棟、井戸跡２基、土器埋納遺構１基、溝跡28条、土坑40基　他

＜遺物＞

土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、褐釉陶器、青磁、白磁、瓦、円面硯土製カマド、土錘、木製品(木簡・斎串・下駄・椀・立体人形・錘・曲物容器・櫛・杭)、鉄

鉄製品（刀子・鏃）　他

(6) 調査概要

今回の調査で発見された遺構の年代は、9世紀から10世紀中頃のものである。

この中で最も注目されるのは、10世紀前半の時期の四面廂付建物跡を中心とする建物跡と井戸跡等の遺構群である。一般に四面廂付建物跡は建物としては格の高いもので、官衙などでは中心的な建物であり、多賀城内では政庁正殿跡と六月坂地区の2棟のみである。城外でも館前遺跡で検出されているのみである。したがって、この地区で四面廂付建物跡が発見されたことは、この場所が重要な施設が置かれた中心部分であることを窺わせる。他に注目される遺構としては、多量の土器を埋設した土器埋納遺構がある。次に出土遺物をみると緑釉・灰釉陶器、中国産陶磁器がまとまって出土しており、多賀城内でもこれほどまとまって出土した例はいまだない。さらに「右大臣殿　餞馬収文」と書かれた木簡が出土しておりこの木簡の内容から遺構の性格を捉えることができる。

以上のことから、四面廂付建物跡を中心とする建物跡や井戸跡等の遺構は、国守の館を構成するものと考えられるが、さらに木簡の解釈によって一層「国守の館」である可能性がきわめて高くなった。

調査区東半部（南東より）

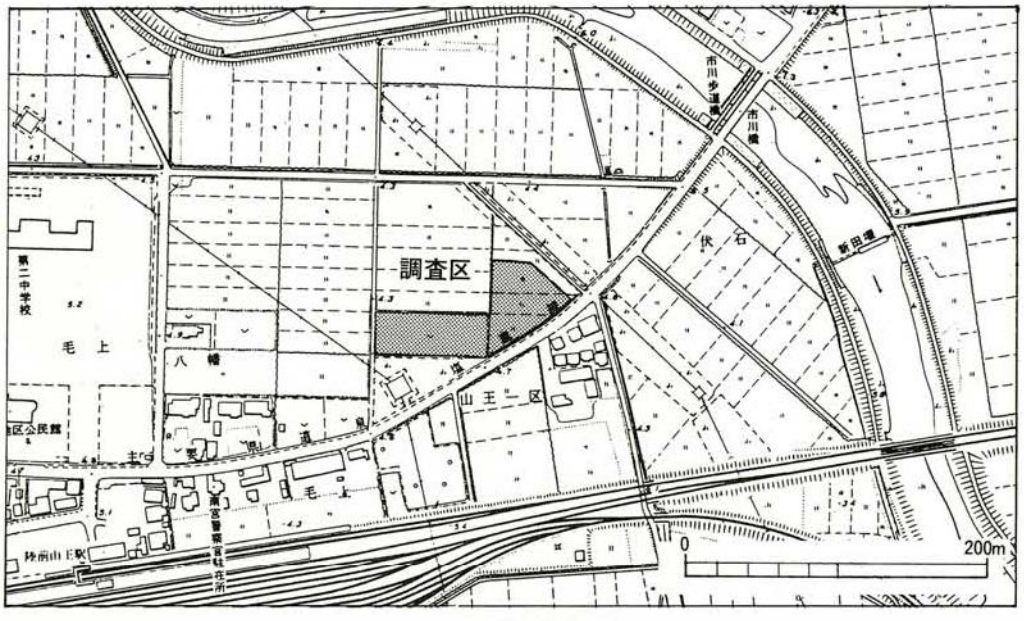
井戸枠出土状況

2．山王遺跡第10次調査

(1) 所 在 地　多賀城市南宮字八幡地内

(2) 調査期間　平成２年４月16日～12月19日

(3) 調査面積　4,000㎡



調査区位置図

(4) 位置と環境

本遺跡は、多賀城市山王・南宮両地区を中心とする東西約２km、南北約１kmの広範囲にわたる大規模な遺跡である。これまでの調査において、特に奈良・平安時代では、国府多賀城と強い関連性を窺わせる遺構・遺物が発見され、多賀城を取り巻く国府域のようすが明らかになりつつある。

今年度の調査は、前年度に引き続き建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する「三陸縦貫自動車道」のうちの仙塩道路建設に伴う調査で、本市教育委員会はインターチェンジ予定地にかかる4,000㎡を対象として、東北地方建設局と委託契約を締結し実施した。

(5) 発見された遺構と遺物

＜遺構＞

道路跡１条　掘立柱建物跡26棟、柱列跡３条、竪穴住居跡６軒、井戸跡14基、土坑14基、溝跡20条　他

＜遺物＞

土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、無釉陶器、白磁、瓦、円面硯、風字

硯、木製品（漆器・盤・櫛・曲物容器・下駄・錘・鋤・捏鉢・田下駄・丸木弓・斎串）、漆紙文書、木簡、石帯、銙帯、古銭、小刀、斧、石製模造品　他

(6) 調査概要

今回の調査で検出された遺構の年代は、古墳時代・古代・中世・近世に大きく区分できる。

特に古代の遺構としては、多賀城の外郭南辺とほぼ方向が一致する道路跡や掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡が検出され、多賀城周辺の都市計画（地割）が明らかになるとともに、地割の中での土地の使い分けなどの具体的な様子が明らかになってきた。これら古代の遺構は、(Ⅰ)道路建設以前、(Ⅱ)道路機能時、(Ⅲ)道路廃絶後の３つの段階に分けることができる。さらにⅠ段階は遺構の主軸方向から２時期に分けることができ、また、Ⅱ段階でも道路のあり方から２時期に分けることができる。年代は、Ⅰ段階がおおむね奈良時代に位置づけられ、Ⅱ段階は、新しい道路跡の側溝埋土より10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が認められることより、９世紀頃から10世紀前半の年代が考えられる。

調査区全景（北より）

中世では、新旧２つの屋敷跡を発見しており、ほぼ同規模で、いずれも溝によって周囲を方形に区画している。新しい屋敷跡は、当初一辺44m の正方形の屋敷が、順次東西に屋敷地を拡大していったことを確認した。年代は出土遺物から16世紀頃と考えられる。

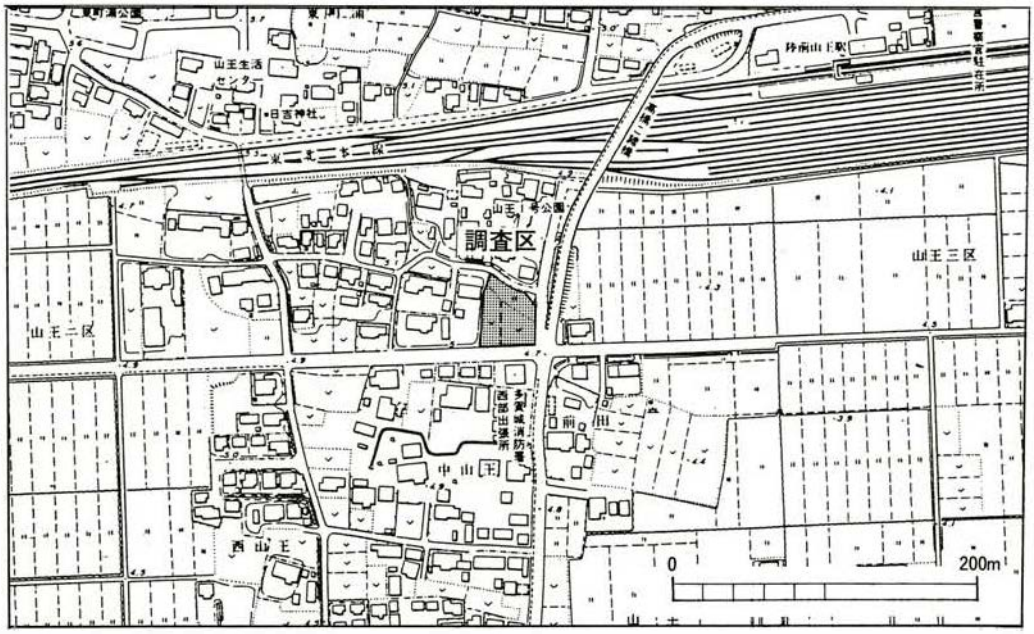
調査風景

3．山王遺跡第11次調査

(1) 所 在 地　多賀城市山王字中山王13番１、23番１

(2) 調査期間　平成３年１月28日～３月６日

(3) 調査面積　240㎡



調査区位置図

(4) 位置と環境

本遺跡は、これまでの調査で古墳時代から近世までの遺構・遺物が多数発見されている。特に奈良・平安時代に属するものとしては、掘立柱建物跡、竪穴住居跡・井戸跡・道路跡が発見されている。遺物には、土師器・須恵器の他に施釉陶器・墨書土器・瓦・硯・石帯などが出土している。これらのことから陸奥国府「多賀城」との関連性が強い地域として認識されるようになってきた。また、平成２年度に調査を実施した山王遺跡第９次調査において、四面廂付建物跡や多量の施釉陶器とともに「右大臣殿　餞馬収文」と書かれた木簡が発見されたことによって、この地域が国守の館跡かと推定された。

今回の調査は、山王遺跡第９次調査で発見された国守の館跡の範囲を確認するために実施したものである。

(5) 発見された遺構と遺物

＜遺構＞

掘立柱建物跡５棟、溝跡14条、土坑２基　他

＜遺物＞

土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、中・近世の陶器、瓦、木製品、砥石　他

(6) 調査概要

今回の調査で検出された遺構の年代は、出土した遺物からみておおむね平安時代に属すると考えられる。

建物跡は、東西3間以上、南北1間以上のものが1棟、東西2間以上、南北3間以上のものが1棟、東西2間、南北1間以上のものが3棟検出されたが、全体の規模が判明できるものはなかったが、これらの建物跡のうち、北側の調査区で検出した東西2間、南北1間以上の建物跡は、2時期の変遷を確認しており、この建物の柱穴は、一辺約70～90cmの方形を呈し、柱痕跡の径は15cmを計る。他の遺構の中には、10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰を含む土坑や小柱穴を検出している。

第Ⅰ調査区全景（東より）

なお、今回の調査区は、幅約12mを計る古代の東西道路から南側約200mの地点に当たり、遺構の年代や出土した遺物からみて、山王遺跡第9次調査区と同様国府多賀城と強い関連性が窺われる。

第Ⅱ調査区西半部（東より）

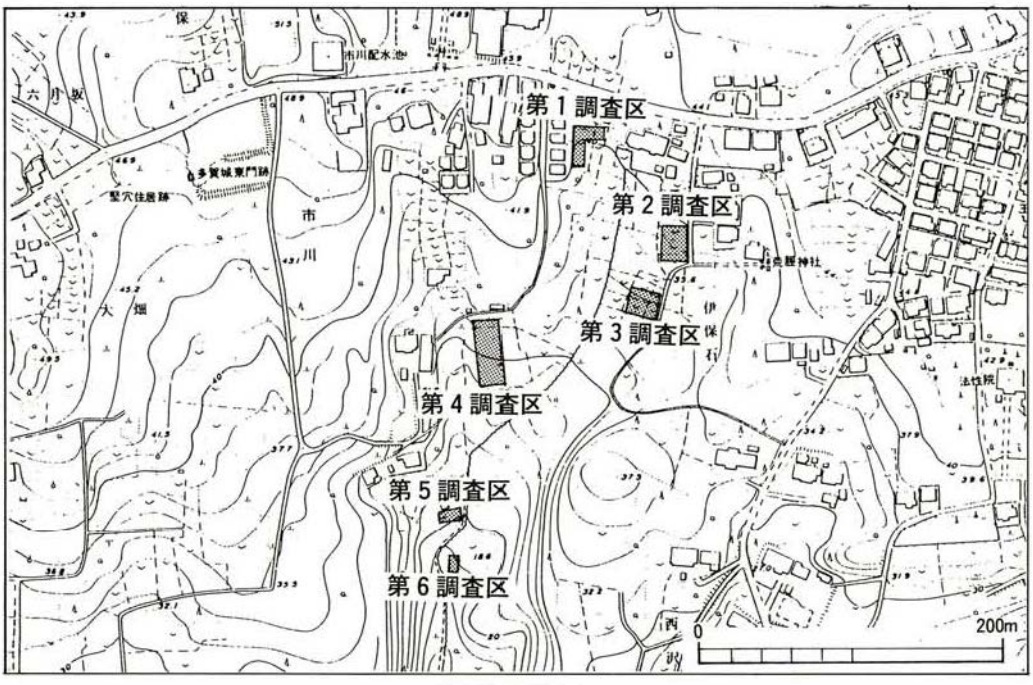
4．西沢遺跡第１次調査

(1) 所 在 地　多賀城市市川字伊保石19番、23番、28番１、29番１、31番１、32番

〃　浮島字西沢91番

(2) 調査期間　平成２年10月22日～平成３年１月16日

(3) 調査面積　1,278㎡



調査区配置図

(4) 位地と環境

西沢遺跡は、特別史跡多賀城跡の東側に隣接し、多賀城市市川字伊保石と浮島字西沢の両地区を中心とし、東西約500ｍ、南北約800ｍの広範囲にわたる大規模な遺跡である。本遺跡は松島丘陵より派生してきた標高約50m の低丘陵の南側緩斜面に立地している。本遺跡は、これまでに本格的な調査は実施されていないが、土師器・須恵器・瓦等が散布していることや国府多賀城に隣接していることから古代の集落跡の存在が考えられていた。

周辺の遺跡についてみると、本遺跡の西側には国府多賀城が所在し、この南面地域の沖積地には、市川橋遺跡があり、山王・新田・高崎遺跡とともに古代の多賀城を取り巻く大規模な集落遺跡を構成している。

(5) 発見された遺構と遺物

＜遺構＞

掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡７棟、溝跡14条、土坑５基、遺物包含層　他

＜遺物＞

縄文土器、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世の陶器、青磁、白磁かわらけ、瓦、鉄製品　他

(6) 調査概要

今回の調査で検出された建物跡、竪穴住居跡の年代は、出土した遺物からみておおむね平安時代と考えられる。

建物跡は、２間×２間の総柱の建物で２時期の変遷を確認しており、柱穴は径約60cmの不整円形を呈している。また、住居跡は、７棟検出したが、いずれも残存状況が悪く全体の規模を知り得るものはない。第２調査区の南東部で検出した住居跡には、北壁と西壁に煙道が取り付き、西壁のカマドの袖に擬灰岩が捉えられている。第３調査区において検出された遺物包含層からは、古代から中世に至る遺物が出土しており、おそらく本遺跡内には中世に属する遺構の存在が窺われる。

本調査区で検出された遺構の年代や出土した灰・緑釉陶器などが出土しており、さらには多賀城跡に隣接することから、本遺跡は陸奥国府多賀城と強い関連性が窺われる。

第２調査区全景（南より）

第４調査区全景（北東より）

5．西沢遺跡試掘調査

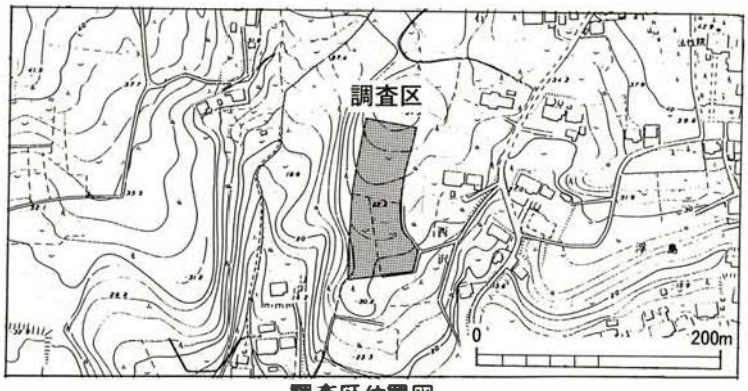
(1) 所 在 地　多賀城市浮島字西沢71番、74番、76番

(2) 調査期間　平成２年６月11日～６月25日

(3) 調査面積　258㎡

(4) 位置と環境

西沢遺跡は、陸奥国府多賀城の東側に隣接し、松島丘陵から派生した丘陵上に立地する。遺跡内には土師器・須恵器・瓦等が多く散布しているが、これまで本格的な調査は実施されていない。今回の調査は、鎌田建設株式会社より宅地造成計画が提示されたことにより、試掘調査を実施したものである。



調査区位置図

(5) 調査概要

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡、溝跡、土坑等の他に整地層もしくは遺物包含層がある。このうち建物跡の中には、柱穴が一辺約70cmを計り、方形を呈するものが２棟検出された。出土遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器などの土器類の他に瓦・鉄滓が出土した。

本調査で検出された遺構は、出土した遺物からみておおむね古代に属するものと考えられる。また、大きな掘り方を持つ建物跡が検出されていることより、国府多賀城と何らかの関連性があると想起される。

柱穴検出状況

6. 高崎遺跡試掘調査

(1) 所 在 地　多賀城市高崎二丁目144番

(2) 調査期間　平成2年9月10日～10月4日

(3) 調査面積　27㎡

(4) 位置と環境

調査区位置図

高崎遺跡は、多賀城市高崎・留ケ谷地区の両地区を中心とし所在する大規模な遺跡であり、特別史跡多賀城廃寺を取り巻くように低丘陵上に立地している。本遺跡は、奈良・平安時代から中世にかけての複合遺跡であり、これまでに実施してきた調査では、平安時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡などが検出されたほかに3箇所で甕棺の出土例がある。今回の調査は地権者より共同住宅建設の協議が提起され、当センターで現地を確認したところ多数の遺物の散布がみられたことから試掘調査を実施したものである。

(5) 調査概要

今回の調査で検出した遺構は、溝跡や多数の小柱穴がある。溝跡は、黒褐色土と暗褐色土を基調とした埋土で、深さ約70cmを計る。また古代の遺物を多く含む層を検出しており、遺物包含層かもしくは整地事業の可能性が考えられる。溝跡の年代については、出土した遺物からみておおむね中世に属するものと考えられる。

溝跡堆積状況

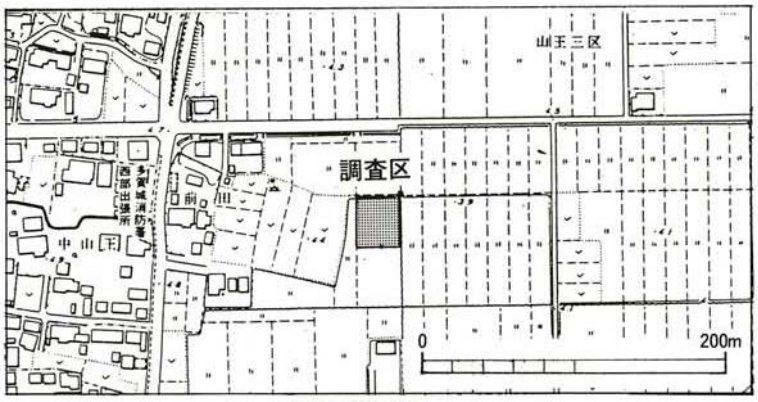
7．山王遺跡試掘調査

(1) 所 在 地　多賀城市山王字山王四区７番５

(2) 調査期間　平成２年10月15日～10月30日

(3) 調査面積　210㎡

(4) 位置と環境



調査区位置図

山王遺跡は、旧七北田川と砂押川によって形成された自然提防上に立地し、古墳時代から近世にかけての複合遺跡である。これまでの発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡、溝跡、土坑、木組遺構が発見され、古代では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡の他に両脇に側溝を伴った道路跡などが発見されている。今回の調査地は、ＪＲ東北本線陸前山王駅から約250ｍ南方に位地する。

(5) 調査概要

今回の調査で検出された遺構は、溝跡、土坑、整地遺構の他に多数の柱穴がある。整地遺構については、大きく２時期の整地事業を確認した。出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器などの土器類の他に瓦等がある。

検出した遺構の年代は、出土遺物からみて平安時代に位置づけられる。また、出土した多量の土器の中には、緑釉・灰釉陶器が出土していることから国府多賀城との関連性が窺われる。

第３トレンチ北半部（南より）

Ⅱ 事 業 報 告

1．展　　示

(1) 今年度の展示について

今年度の展示は「速報・発掘された遺跡展ー平成元年度の成果報告ー」（以下速報展と称す）と、第4回企画展「多賀城碑ー今まさによみがえる」を開催した。

速報展は昨年度から始めたもので、前年度発掘を行った遺跡の紹介、出土遺物の展示を通して、身近な埋蔵文化財に対する認識と理解を深めてもらう目的で行っている。企画展に準ずるものとして、今後定着させていきたいと考えている。

企画展は「多賀城碑」をテーマとした。碑そのものを正面から扱った展示はこれまでなかったのではないだろうか。今回碑を取り上げたのは、碑をめぐる研究史、論文などが集大成され、碑の真偽論争に最終的な決着をみたとの前提に立ってのことである。碑の歴史資料としての価値、碑にかかわるさまざまな事象をどれだけ視覚に訴える形で展示できるかが大きなポイントであった。結果は概ね好評をもってむかえられたのではないかと思う。

(2) 「速報・発掘された遺跡ー平成元年度の成果報告ー」

期間：平成2年6月12日～7月15日

① 展示の趣旨

市内では毎年、宅地造成等のため数個所で発掘調査が行われており、ここ数年は仙塩バイパス関連の大規模な調査が続いている。このように開発に伴う事前調査により、これまで不明であった多賀城市の歴史の細部が次第に明らかにされるわけであるが、その一方で遺跡は姿を消してしまうのである。そこで、前年度に発掘された遺跡の中の主なものを選び、出土遺物を網羅した資料展的な展示を行い、遺跡の重要性を理解してもらう一助になればとの考えから、このような企画をしている。速報展では発掘を行った地区毎に紹介し、個々の特徴を際立たせることによって、概括的な市内の歴史とはまた違った面を見ていただけるのではないかと思う。

② 展示の内容

平成元年度は試掘を含めて7個所で発掘調査を実施した。そのうち、市川橋遺跡第7・8・9次調査、山王遺跡第8次調査、新田遺跡第11次調査分を紹介した。

各調査区ごとに概要、写真パネル、遺物で構成した。

③ おわりに

市内の遺跡は、大抵いくつかの時代にまたがっているいわゆる複合遺跡と呼ばれるもので、遺物の展示は各時代別に行っている。しかし、場合によっては時代を超えて同一性格をもつ物で構成する部分を設けるなど、その年度の遺物内容によって、変化をもたせていくことも考え

なければならない。また、昨年度の反省にたってできるだけ遺物は復元するように努めた。

「速報・発掘された遺跡展」展示風景

(3) 第4回企画展「多賀城ー今まさによみがえるー」

期間：平成2年10月2日～12月24日

① 展示の目的

現在、多賀城の南門跡に立つ多賀城碑は、「つぼのいしぶみ」という名でも知られている。この碑には多賀城の創建年代、改修年代が記され、碑が建立されたのは改修の年、天平宝字6年である。このように、実年代を二つも含むなど極めて魅力的な内容をもつにもかかわらず、強硬な偽物説があり、碑はこれまで歴史資料として扱われなかった。

碑は江戸時代の初め頃発見され、すぐに歌枕「つぼのいしぶみ」の名で呼ばれた。そして多くの人々の関心を集めたが、やがて碑は「つぼのいしぶみ」ではない、しかもこれは天平宝字6年ー奈良時代に作られたものでもない、と否定され、偽物として忘れられた存在になってしまった。ところが多賀城跡の発掘調査が始まり、調査成果と碑の記載内容が一致することがきっかけとなって、碑は見直され再び脚光をあびるようになった。現在偽物説は覆されたといってよい。まさにドラマチックな復権である。奈良時代の文字資料がほとんどない東北にとって、また全国レベルで見ても多賀城碑は第一級の資料となることは間違いない。

真物には無尽蔵の情報が込められているが、そのような碑のもつ測り知れない価値をさぐってみたいと考えた。

② 展示の内容

碑が発見され、「つぼのいしぶみ」としてもてはやされた江戸時代。一転して偽物扱いされ

てしまった明治・大正時代。そして人々の記憶から消えてしまっていた碑が、昭和40年代に入って再び注目を浴びるようになり、今日ようやく偽物説が払拭されるに至る。このように碑をとりまく環境は大きく揺れ動いた。こうした動きの中から碑にかかわった人々の紹介、拓本の普及、歌枕「つぼのいしぶみ」とは何か、そして碑の真価を再認識させた考古学の成果、こういった項目を設けてコーナーを設定した。

＜導入＞

碑が建立されてから今日に至るまでの碑をめぐる様々な事象を概観してもらうために、年表を作った。この場でおおよその流れをつかんでもらい、これから展開していく内容の時期的目安としての役割を持たせた。また、偽物説の主な根拠を文字パネルで示し、さらに象徴的に、「明治時代の多賀城碑」の写真パネルを置いた。

〔パネル〕「壺碑－奥州仙台名所尽集より」(絵図)、明治時代の多賀城碑（写真)、偽物説の主な根拠（文字）

〔資　料〕多賀城碑朱拓

＜コーナー１＞　碑をめぐる人々

多賀城碑は、江戸時代の初め（1650年頃）に発見されたと言われている。そして発見されるや否や「つぼのいしぶみ」という名で呼ばれた。これは陸奥国を代表する歌枕の一つで、その名前故に、碑の名声は全国に知れ渡った。それと同時に拓本が流布し、人々は競って手に入れようとした。また、碑に関する記述も多数にのぼり、当時の関心の深さがしのばれる。

＜コーナー１＞碑をめぐる人々

碑にかかわった多くの人物の中から、新井白石、水戸光圀、伊達綱村、井原西鶴、松尾芭蕉、喜田貞吉、大槻文彦を選び、彼らが碑とどのようにかかわったかを紹介した。

〔パネル〕新井白石・水戸光圀・伊達綱村・井原西鶴・松尾芭蕉（肖像画)、喜田貞吉・大槻文彦（写真）

〔資　料〕佐久間洞巌宛新井白石書簡、素龍清書本「おくのほそ道」(複製)、蕪村筆「おくのほそ

道図巻」(複製)、言海(草稿)

ー歌枕の世界ー

多賀城碑が発見と同時に全国的に有名になったのは、「つぼのいしぶみ」の名で呼ばれたためである。「つぼのいしぶみ」というのは、平安時代以来歌に詠みこまれた歌枕で、みちのく、はるかなもの、といったことを表している。しかし今のところ多賀城碑が歌枕「つぼのいしぶみ」と同一のものであるのか、さらにはつぼのいしぶみが果たして実体のあるものなのかどうかさえ、実ははっきりしていないという。この多賀城碑とつぼのいしぶみとのかかわりについては、現在でも結論が出ていない。なお、多賀城市内にはみちのくを代表する歌枕が集中しているが、これは江戸時代の整備の結果と言われている。このような独特の歌枕の世界について、ごくかいつまんで紹介した。

〔パネル〕仙台藩歌枕分布図、南部藩歌枕分布図、歌枕をよみこんだ主な和歌

＜コーナー2＞　拓本の普及

碑の名声が高まるにつれて、拓本を求める声も多くなった。しかし、仙台藩では碑を保護する意味から、拓本をとることを厳しく制限した。そこで原拓からおこしたさまざまな版が作られ、碑そのものから取るかわりにそれら“碑の複製”から拓本をとるようになった。現在利府町に残る木版型は、塩釜神社の神官の流れをくむ家に伝わっており、このような碑の拓本作成に塩釜神社がかかわっていたという根拠の一端がうかがえる。

〔資　料〕木版型、木版からとった拓本

＜コーナー3＞　碑は真物である

明治時代に偽物であるとの説が出されて以来、碑は訪れる人もなく忘れ去られた存在であった。多賀城跡の発掘がはじまった当初も、碑はほとんど顧みられることがなかったという。多賀城跡の発掘はまず政庁跡から開始され、何期かの変遷が捉えられた。そのうち、8世紀半ばに創建の建物が大大的に改修されている事実が判明した。これは発掘以前にはまったく予想できなかったことで、発掘で初めてわかったわけであるが、

＜コーナー3＞碑は真物である

多賀城碑を見るとその事実が明記されていたのである。「天平宝字六年恵美朝獦修造也」というのがそれである。これがきっかけとなり、それまで偽物として遠ざけられていた碑をもう一度見直してみようという機運が高まった。そして碑についての研究史、偽物とした根拠、字体、彫り方などさまざまな観点からの見直しの結果、これまで碑を偽物としてきた根拠は否定され、奈良時代に作られたものとみて何の矛盾もないことが判明した。

〈コーナー3〉碑は真物である

また、碑面の文字は一定の大きさのます目の中に割付けられたのではないかとの予測のもと、そのます目を作るのに用いたであろう用尺を求めたところ、奈良時代の天平尺ではないかと推定された。このような見方から碑の真偽に迫ったものはこれまでなく、碑が奈良時代の建立であることの強力な裏付けとなろう。

多賀城のⅠ期・Ⅱ期の年代決定に際し、決め手となった瓦・木簡などの考古資料、文献資料を展示し、発掘の結果得られた多賀城の創建・改修年代と碑文にみえる二つの実年代を対照させ、碑の信憑性の裏付けとした。

〔パネル〕 8世紀の東アジア・古代城柵分布図（地図）、多賀城跡全景（カラーコルトン）、多賀城第Ⅰ期政庁復元図、多賀城第Ⅱ期政庁復元模型（写真）、国分寺造営の詔・陸奥国産金関係記事（文字）、秋田城復元図、桃生城跡（写真）、碑文の割付け（模式図）

〔資　料〕 多賀城第Ⅰ期軒瓦・平瓦（「二百長」ヘラ書き）、多賀城跡出土木簡（「丈部大麻呂」・復製）、陸奥国分寺軒瓦、多賀城第Ⅱ期軒瓦、黄金山産金遺跡出土軒瓦・宝珠片・丸瓦（「天平」ヘラ書き）、桃生城跡出土軒瓦、郡山遺跡出土定木木簡（複製）

－日本三古碑－

日本三古碑とは那須国造碑（栃木県）、多胡碑（群馬県）、多賀城碑をさす。いつ頃からこのように呼びならわされるようになったかは不明であるという。いずれも8世紀の建立で、那須国造碑が最も古い。多賀城碑文中には、他の二碑の文字をモデルにしたと考えられるものもある。現在那須国造碑は国宝に、多胡碑は特別史跡にそれぞれ指定されている。

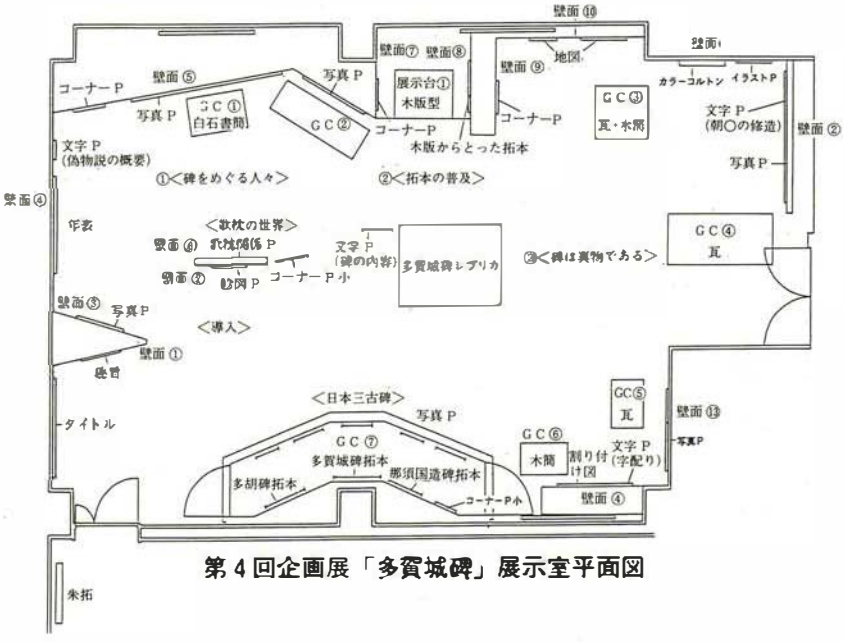
ここでは三古碑の拓本を展示し、各々の碑文・内容・特徴などを比較してもらった。

〔パネル〕笠石神社風景・那須国造碑・多賀城碑周辺・多胡碑覆屋・多胡碑（写真）、那須国造碑・多胡碑釈文

〔資　料〕那須国造碑・多胡碑・多賀城碑拓本

③　まとめ

多賀城碑が奈良時代に作られたものとみて何等矛盾がないという見解は、すでに10年前に出されていた。それにもかかわらず歴史資料として保留にされていたのは、何をもってして偽物としたのか、偽物説の根拠は果たしてゆるぎないものなのか、何が立証されれば真物として扱えるのかなど、これまで碑についての見解がたどってきた複雑な経緯を筋道立てて整理し、理解することが困難であったからであろう。それは、碑に関する論文等が単発的に、しかも一般には手に入りにくい類の書籍に発表されたのが大きな原因という。しかし、一昨年『多賀城碑―その謎を解く―』という、これまでの碑に関する論文、研究などをまとめた本が刊行され、碑をめぐる諸問題が容易に理解できるようになった。そして、もはや思い付きで碑の真偽を云云することを許さない緻密な論証がそこには見られるのである。今回の展示は同書によるところ大であった。展示を通して少しでも碑のおかれている現状や真価を理解してもらえれば、目的の大部分は達成されたと言ってよい。ただ今回、偽物説とそれに対する反論を具体的に展示物に反映させることができなかった。これは碑を真物とする上で欠かせない要素であるが、「物」で示すことが難しく、文字パネルでの紹介にとどまらざるを得なかった。我々の力不足であったことを反省する。なお、本展示で初めて文書資料を展示した。取扱い、温度・湿度の調整など気を使うことが多かったが、良い経験になった。これをふまえて、今後も場合に応じて積極的に文書資料を取り入れていきたいと思っている。



第４回企画展「多賀城碑」展示室平面図

2．普　及　活　動

(1) 現地説明会

「山王遺跡第９次調査について」　　平成２年10月６日　担当者　石川・相沢

「山王遺跡第10次調査について」　　平成２年10月20日　担当者　千葉・石本

(2) 館内における普及活動

期　間	内　　容	対　　象	依　頼　機　関	担当
2．5．8	史跡案内	東北財務局	市企画財政課	滝川
5.22	史跡案内	退職校長会宮城東支部	市社会教育課	〃
5.27	歌枕について	平成2年ラジオウォーク	東北放送	〃
6．2	史跡案内	小坂町読書会	小坂町読書会	〃
6.20	史跡案内	自治研修所研修生	市産業経済課	〃
7.24	山王遺跡現場見学	新採・転入教職員	市学校教育課	石本
8．8	史跡案内	湯津上村長他	市企画財政課	滝川
8．9	山王遺跡現場見学	新採・転入教職員	市学校教育課	石本
8.23 ～8.24	児童校外学習（山王遺跡発掘現場）	６学年児童	多賀城八幡小学校	〃
8.29	山王遺跡現場見学	古代史研究会	国学院大学	滝口 千葉
9.28	史跡案内	婦人会下馬支部	市秘書広報課	相原
10.16	企画展「多賀城碑」紹介	宮城ホットライン	ＮＨＫ	滝川
10．9	史跡案内	東北財務局	市企画財政課	〃
10.16	史跡案内	吉井町教育委員会	市社会教育課	〃
10.21	史跡案内	市民ハイキングの集い	市社会教育課	〃
10.24	史跡案内	多賀城中学校文化部	市秘書広報課	〃
11.29	史跡案内	東北財務局	市企画財政課	〃
3．1.18	史跡案内	仙台教育事務所管内公民館長研修会	市中央公民館	〃

(3) 講演会などへの協力

期　間	題　　目	会の名称	主催団体	担当
2．9．2	発掘された中世のくらし	郷土史講座	市中央公民館	千葉
9.16	中世の歴史を訪ねて	郷土史講座	市中央公民館	〃
12．8 ～12．9	山王遺跡第９・10次調査	平成２年度宮城県内発掘調査成果発表会	宮城県教育委員会	相沢 千葉
3．2．9 ～　2.10	山王遺跡第９・10次調査	第17回古代城柵官衙遺跡検討会	古代城柵官衙遺跡検討会	石川 千葉
3.17	史跡めぐり	史跡案内ボランティア養成講座	市社会教育課	滝川

(4) 資料の貸し出し

依頼機関	目的	貸出期間	資料名
岩手県立博物館	「北の鉄文化」	2．9.20 ～12.10	柏木遺跡遺構模型、断面剝取り
多賀城市立図書館	館内展示	3．1．5 ～ 3.20	永根貝塚出土浅鉢・小型壺・注口土器各1
名古屋市博物館	「陶器の流れ」	3．3．2 ～ 4．7	灰釉椀・皿（山王遺跡）、灰釉椀・長頸瓶（市川橋遺跡）、灰釉平瓶、瀬戸花瓶瀬戸破片（新田遺跡）
多賀城市立城南小学校	校内展示	3．3.15 ～	土師器4、須恵器11、赤焼き土器2（市川橋遺跡）、写真パネル2

Ⅲ 事務報告

(1) 平成2年度展示室入館者数

月	一般	高校	小・中	招待券	免除	視察	その他	合計(人)	開館日数
4	247	2	196	5	0	19	120	589	26
5	245	3	86	3	382	45	49	813	26
6	581	3	198	3	0	70	113	968	26
7	388	14	34	11	37	103	38	625	26
8	233	2	57	1	144	57	19	513	23
9	208	2	60	0	202	85	7	564	25
10	390	1	28	17	61	131	79	707	25
11	469	1	38	4	213	140	17	882	26
12	120	1	30	4	21	74	10	260	23
1	143	0	36	0	30	15	0	224	22
2	136	3	43	0	28	9	7	226	23
3	191	0	86	1	347	21	55	701	26
年計	3,351	32	892	49	1,465	769	514	7,072	297

(2) 平成2年度予算概要

（単位：千円）

	事業名	当初予算額	摘要
1	埋蔵文化財緊急調査に要する経費	6,000	山王遺跡ほか発掘調査費(国庫補助事業)
2	史跡のまち発掘調査に要する経費	2,888	試掘調査費、発掘出土遺物整理費、年報作成費
3	埋文センター普及、啓蒙に要する経費	5,016	埋文センター運営諸経費、企画展等展示開催費
4	埋蔵文化財出土品の保存処理に要する経費	1,000	発掘出土遺物保存処理費(国庫補助事業)
5	発掘調査受託事業に要する経費	46,318	開発行為に伴う発掘調査費
		61,222	

多賀城市埋蔵文化財調査センター職員録

（平成３年３月現在）

所長	斎藤一司
主査	赤坂みゑ子
研究員	滝口卓
〃	石川俊英
〃	千葉孝弥
〃	石本敬
技師	相沢清利
嘱託	滝川ちかこ
〃	相原洋子

多賀城市文化財調査報告書第28集

年報 5

平成４年３月31日 発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（022）３６８－０１３４

印刷　伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目１－７
電話（022）３６２－０８０５